



^ 13
638
4



門 へ 13
號 638
卷 4

門 贈
號 628
卷 4

都老子卷之四目錄

達磨大師之章
官家玄猪之章
稻荷神德之章
堂上元服之章
酌酒對雪之章
苦樂在心之章

五五〇

昔無五心之章
 由新撰者之章
 望江不取法之章
 餘百餘年之章
 宜求其所以
 遠望以明之

都老子卷之四

黎春先生銓評

東都

名張湖鏡

編著

達磨大師之章

十月廿日、達磨大師の忌日に、くも宗直
 寺に於て法事供養をせしむ。行末くも色は、いそ系
 詣せん。と先生より先ん曰く、き友一人もあ
 ひ。まの南海寺といふ精舎まのり。爰より二見
 あるを、いしに、いふも法より、つるし、よて在教
 家羅也也。志るふ日たる、返家亦乃不を、今



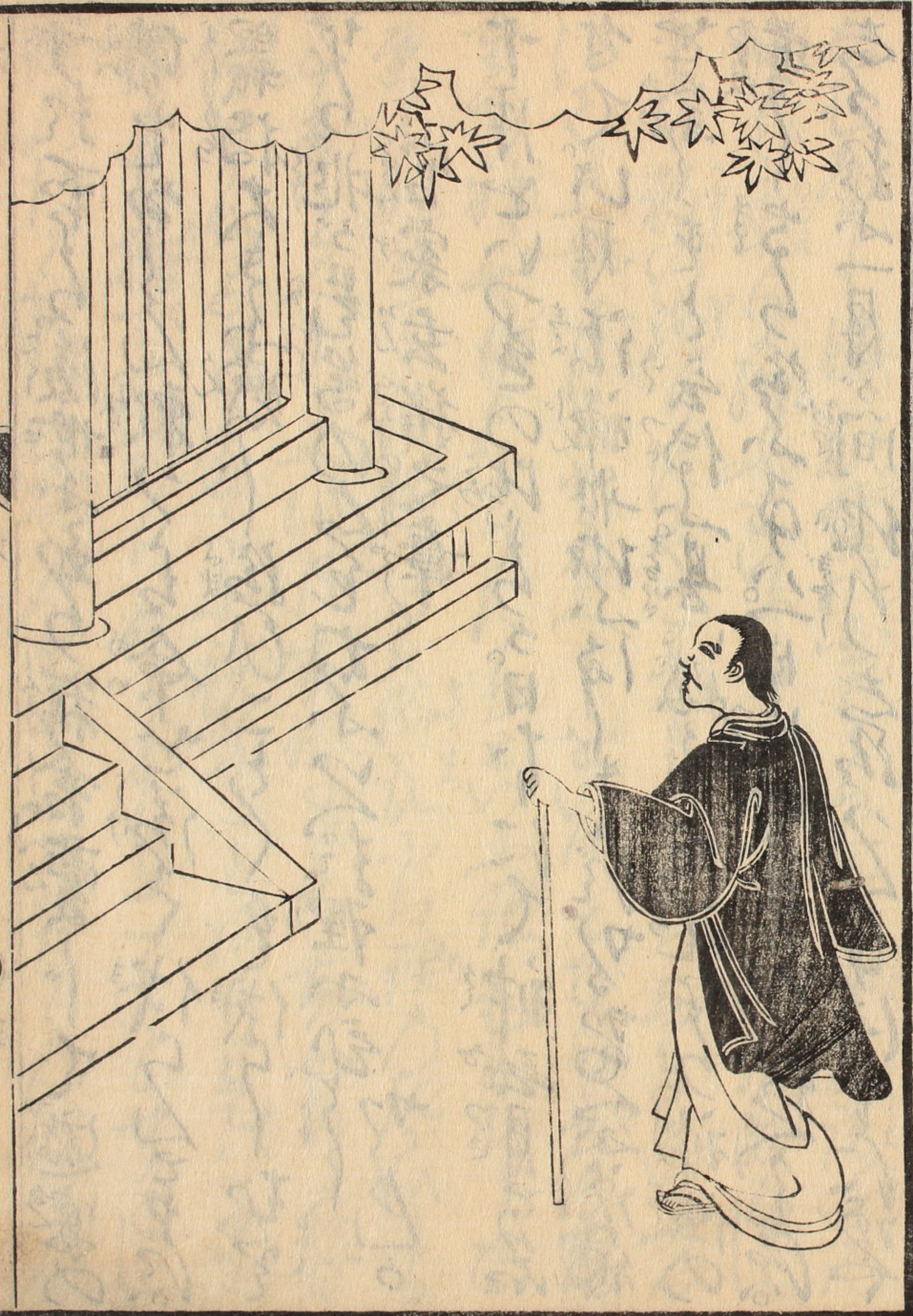
集諸する人なり。やぎ成りふ。他家乃祖
佛に忌日にあ。を宗の尊くも賤群要する
る。いつまの國ふとも同ト。まきふ。か。あふ人の集
諸其ぬいふもや。遠塵といふ。祖師の人の知
ぬうと。くも。さふ。あ。む。何。田。孫。く。画。少。と。書。か
し。塑。形。ま。で。不。作。り。か。し。て。人。こ。も。て。あ。を。ふ
か。を。德。ま。ぐ。む。こ。る。あ。か。ら。ふ。一。と。さ。う。ら。ふ。は。東。教
乃。禪。宗。の。俗。徒。幾。万。人。也。といふ。と。ある。が。う。た
そ。を。ふ。か。く。集。諸。せ。ざる。と。い。ふ。あ。は。海。に。と。ふ。あ。や。志
き。ゆ。な。ら。う。とい。ふ。せん。生。の。い。ま。く。予。を。さ。う。り



し。時。日。世。尊。に。あ。ま。さ。る。と。い。は。る。に。は。色。あ。ふ
の。ご。と。く。お。ら。る。集。諸。の。人。か。ら。う。り。由。大。行。と
い。は。れ。侍。ふ。た。ら。ひ。り。を。六。さ。を。も。化。宗。の。ご。と。く。こ
た。り。ふ。人。の。集。諸。せ。ぬ。了。我。い。宗。の。い。ま。ご。と。あ
ら。ざる。あ。かり。ご。と。ふ。今。時。か。く。の。ご。と。く。佛。法。さ
う。し。丹。行。ま。り。な。れ。ば。社。と。後。の。金。三。ふ。只。あ。る。後
ぞ。く。こ。ひ。け。を。さ。も。い。ま。あ。あ。も。又。を。理。何。ら。ん。地
盛。ら。り。か。る。時。ら。ち。と。後。の。も。し。の。法。事。佛。法。を
限。る。諸。道。た。ふ。と。色。あ。あ。事。な。ら。う。法。は。た
土。元。の。末。に。去。方。也。とい。は。る。後。深。く。佛。法。を。信

或時天竺一海り。海のりら佛跡と稱まんと
くともく。沙りらふ。天竺一海り。佛跡と稱まんと
法を奉たを。此半に及んた。靈鷲山一登りんと思ひ尋ちるふ。四に今
人の系流を稀めて。猛獸多く出て
行路難有。人の上れる。佛法乃舊比之。盛衰ある。海りて傳来の
未だ四に。檀宗乃達磨忌の。事法。此宗に限

ら次起て。禪の事と見らる。化宗の。講會と傳り。俗と教化する。海りて
かきも。誰そ人。禪宗を。地獄。沙海も。天竺といふ。僧俗。東福寺に
北傳司と。義持公。賞。北傳司。東福寺。僧徒。紅
椽の樹と寺内。小椽。好む。是。我。常。不。歎



すれやらの後世もあつた積念を憂へて遊宴の
 傷をあらん程くも命と後く伐らんや
 義持大まき事感へし後ひこもくを伐らんむを
 りり北が是等ののらもあふに於理ふ云々
 官家玄猪之章

十月といつきの比らう。日本にて神皇月と名
 有てい月法神非地ふ海まきんかかあふ法神
 と案ふると云傳ふ是い後しと説なら。神徳の
 尊くちりあふ事一日片時色もな程くも後
 ちるおふ一月の間地り志あらしめ海にたか

志む海し。海も雲れをたらしに廿月法皇乃
 神々集り後ふ事より事りるも俗説成也
 十々教の終りにて。まらりよる事きといふ
 にく。上ま月と云ふ人しといひとなく云る後
 里々神皇月と云らたりたりといふ後。是母ちりこ
 ちるにらまき。後想へて俗説少の理乃たがひる
 事多うる人し。又い月皇れ子こそ。事あふ程
 候とらちとく。事ふ後ふことあり。是ハ子を
 行を持べき事ありなる事。こもすすに
 理乃たがむたふ事。人こして子なくんばなる也

かく後子と教ふはことさうりなきも子と何ん
 持て我身乃さうりにしもあらざる人お世よ
 お後まきうは百家ふ一二家なるべし海を
 貴族にてたふ男子たけきバ思をかくしや
 しかた聖人の語も何り持さうふ貧賤乃
 うりうら子花の多きと教ふんゆか
 いりまき後れ月亥乃日と月ひて祭持とい
 む亥といふ獸も子とた行く産て持心徳育
 相もまばもまふあやうなきため乃り成す是
 又一傳の見込なりしうらふ十二支の内氣ら

初づきの生終にとも。子れ生ぜざるハあし生
 て無子に育てる。人間にまきさうぬなり。
 亥にうまざるべし。人間とも自然の理より産
 すといはた。人種といふ物なきしんと禽獸ら
 お産おもと種と族多し。亥月亥日の祭らハ佛
 家より云あせるふや。辨才天経よ亥の月亥れ日
 餅をぬく辨才天へ供養する。子と載せらる。
 亥れ日の祭らハ子と持たうら乃祭めてもま
 産る。十月、亥れ月、廿二支の強を六
 周歳の強乃神靈と祭を祀成なり。歳小

かきくた。若物の始終式ありき。和漢古より
 こま有り。日本にても亥の子祭り久しき事
 也。之始を云くは延喜式にもありき。上古より
 の事なり。今に或る事にて所玄猪とて禁
 中にも行はる事なり。天子此所前にて所通
 所盃相酌く。尤くちいさき所餼所はたし
 ちかせ。厨下に給はる公卿は黒く四位は赤く五位
 の官人は白きと給ふ。そ夜不系の友人は長橋
 け馬返中あり。頭戴を餼ふ。其のふれ葉と葉の
 花とそ紙小包にて給はる。亥の日に二夜は所六

お葉鴨脚の葉は桐の葉のふれ葉を毎夜入
 らる。かり俗ふ。玄猪をふ。は所儀式の所諸
 書にのせしる。そも少はる。乃遠有り。は説ハ現
 に正親町公通卿の所説故書より先傳る

稻荷神徳之章

十月八日諸國をて小。鞠祭又所火焼とく。鍛冶
 所不祝ふ。是ハむ。一葉小。飛治宗近と云。飛
 治山城の所紀伊郡の稻荷と深く尊信して
 即富山の植土と刀。鈕乃焼丹土とて。飛
 けとハ。家社乃加護と得と。名を此名とゆ。り

其時白狐ありて相繼ぎて打撃る由之傳ふ。是より
 世ふ祭もなる事には。先生こそといま。飛治の
 祭るるの、宗道よらの子にてもあるべし。宗道
 稻荷の舊飯成山といふ山の名あり。神の伊
 名、倉稻魂又、保食の神と申すなり。五穀蚕
 糸を生くは、神徳なる由。乃、民の安さなる
 事。もつむ屋あり。志うれども、刀鉞の事には、おかし
 らざる。ゆがむをぞも。神代乃時、神代乃時、の言に
 殺すは、給ふ時、血流く、軒遇、突智といふ神を
 せりと。は、軒遇、突智、火とつる。とら、給ふ神な

此を刀鉞と作る者、給ふ言伝す。き、道理あり。
 十一月、一陽來復の月か。是も火の徳也。
 表せり。又八日を利あり。ハ、神代、不用、也。
 又一説に、易の復卦、乃、辟、也。及復、其道、七日、來
 復。也。也。及、小世、針灸、藥に、七日、と、一回、と
 八日、も、あ、え、の、由、來、復、の、ゆ、ゆ、て、用、由、也。
 上古、七日、と、一、月、と、立、る、曆、法、何、り、と、也。
 さ、ま、バ、漢、氏、初、夜、の、裏、幕、の、ま、ま、に、月、朔、日
 漢、とい、つ、る、も、の、つ、ま、不、月、に、あ、ぬ、ま、さ、り、と
 不、と、し、る、朔、日、に、あ、る、月、に、あ、る、ゆ、も、あ、る、ま、さ、り、と、也。

了ごごとく。七日と一月とすればは朔日八日ありをい
 へば、（一） 猶若の神矣。そこの言信す
 とも、（二） 猶若の神矣。そこの言信す
 さる、（三） 續日中記とて、（四） 神業和のこゝろ也。
 所位從五位下の赤神とて、（五） 世法のし
 神矣。赤神、（六） 赤神也。赤神、（七） 赤神也。赤神、（八） 赤神也。
 正位と何ぞあるも、（九） 正位と何ぞあるも、（十） 正位と何ぞあるも。
 以獸隨血とて、（十一） 以獸隨血とて、（十二） 以獸隨血とて。
 には、（十三） 猶若とある事あり。是猶若の神徳乃
 すら、（十四） 猶若とある事あり。是猶若の神徳乃
 すら、（十五） 猶若とある事あり。是猶若の神徳乃

何れやとて、人小害をなすあり。海は益をなす
 あり。そこの言信す。猶若の神徳乃、
 まりて、人を見あらざりて、（一） 猶若の神徳乃、
 が、（二） 猶若の神徳乃、
 る、（三） 猶若の神徳乃、
 こと、（四） 猶若の神徳乃、
 久し。猶若の神徳乃、
 護成得る。猶若の神徳乃、
 こと、（五） 猶若の神徳乃、
 何れ。我亦も、
 何れ。我亦も、

及眉り。人ともうに紙ハ彼ホが申にとも各
別の天性と云たり。たがさむく人もまか
く眉りの天性成る

堂上元服之章

は月十五日にら都鄙も毎く元服髪並たび
こき袴着とてつゝるあり。是も一陽奉復乃
月ふて。殊ふ十五日。月光を備るこもなきを
陰沈盛ある時節なり。由一剛剛の徳と云り
用事むむなら堂上元服と云民間
元服と云。あかうるもさる由一をいへし

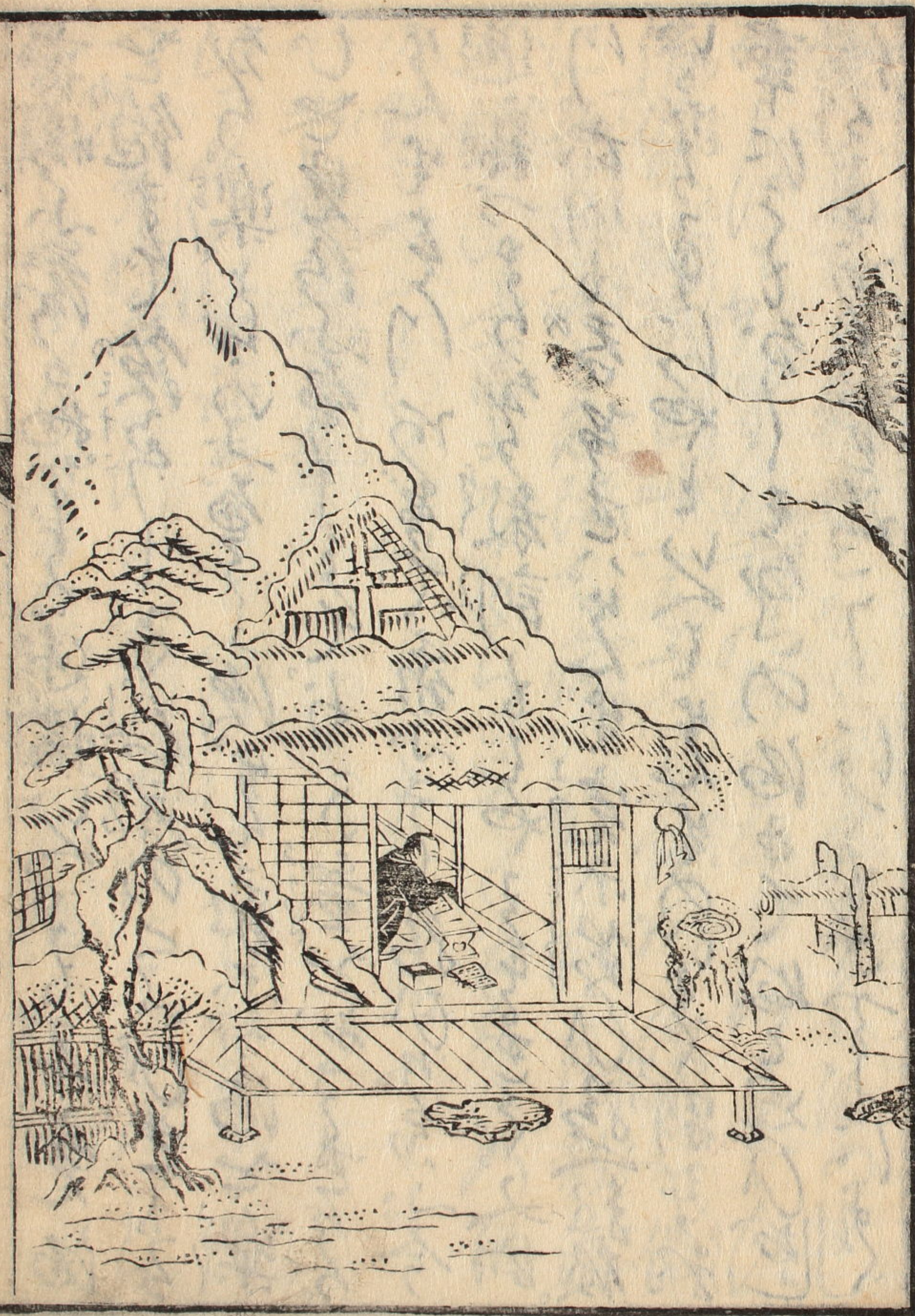
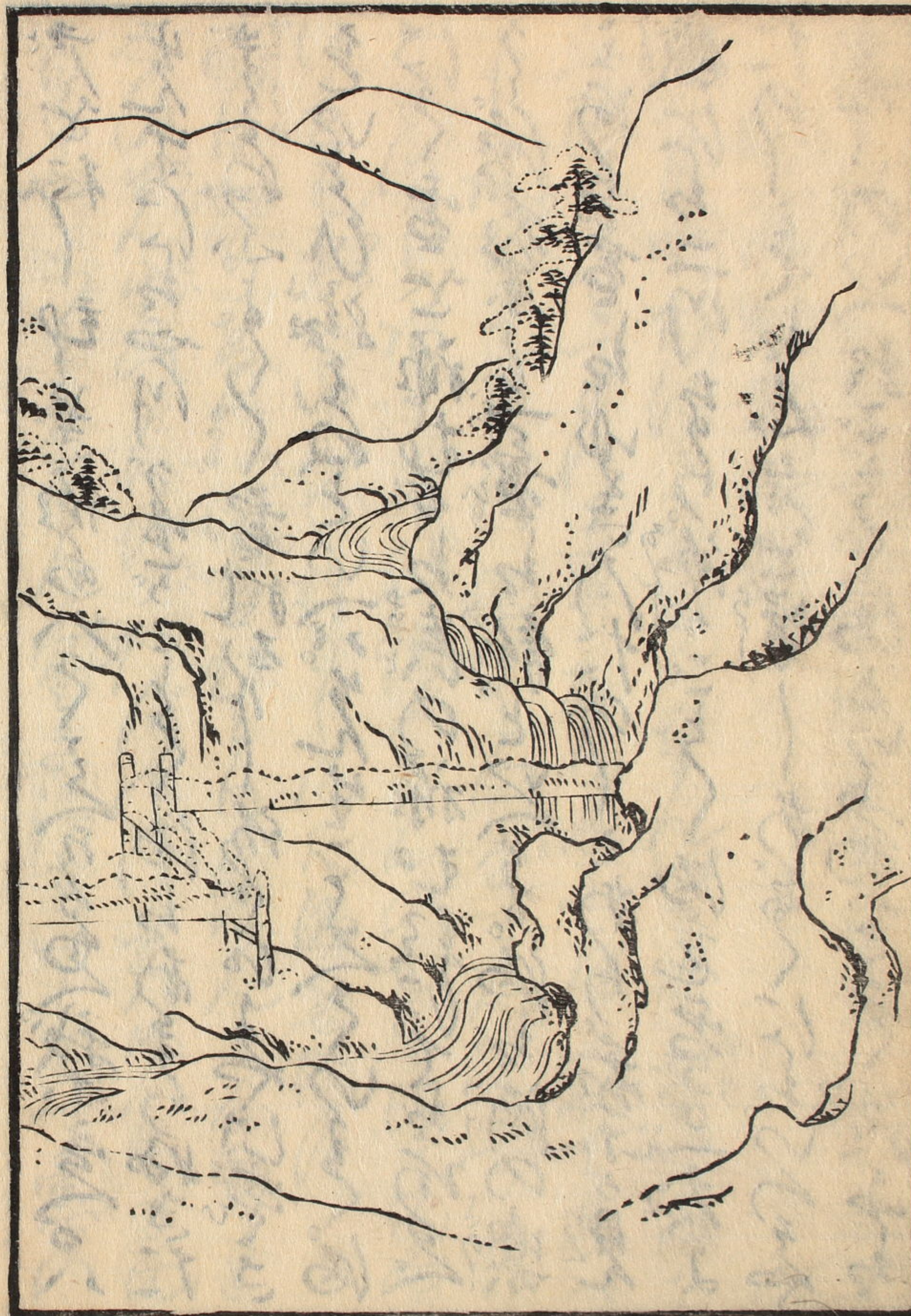
形と幼童ふつあゆむ。堂上の元服、今まで
有るの眉を剃り髪にして。毛眉の上額乃
際よ雲といふ丸く二つとあふなり。是を
眉といふ。但し一は眉ハ十六七歳はまをた
う形。まらあふ止ぬるもあり。甚成る
ふらふ。何れも眉ハ御免の勅許と蒙
りて止るなり。高眉を止る形、時本眉を
元のこしくあふれし時、服の袖をぬり
なら。金黒といふから元服の日、齒を鉄漿に
て染るなり。すべと堂上、法家より齒を

深^{そめ}く^ね白^{しろ}き^の無^な終^{はつ}成^{せい}す^しなり

酌^{しやく}酒^{しゆ}對^{たい}雪^{せつ}之^の章^{しやう}

十二月中旬^{じふにがつちゆうじん}に^もあ^らな^ん。と^も終^{はつ}成^{せい}す^しなり
不^ふ隨^{ずい}りて^つつ^のれ^る事^{こと}あ^らな^し。な^らば^もあ^らな^し。
一^い詠^{えい}あ^らが^まま^の酒^{しゆ}ひ^とら^ずん^があ^らな^し。
と^もあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
け^けを^をあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
面^{おもて}白^{しろ}の^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
あ^あら^なし^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
白^{しろ}の^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。

先^{せん}生^{せい}の^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。
ま^まの^のあ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。あ^らな^し。



衰憐ふ落る抱きとく迷懐しつるも畢竟酒
と飽まで飲らうとくん酒のくさびきしる
かり。楽とらひて酒を飲ん。先家木が酒と樂
いと見病ふ病うとておろい。量とあさきりり。
せん生をいり。何ぞて。病ふう。病ひり。多ふ。今
近氣づまりから教訓もたまや。まきまき。又お
り。六川も吞皆さ。せん生。完示。病ひ。病ひ。病
い。なら。子にや。と。い。も。せん生。の。い。ま。く。別。を。ね
事。に。い。も。か。し。を。か。この。酒。中。て。ぬ。と。思。ひ。酒
ゆ。ら。子。何。ら。を。病。う。に。い。も。ま。や。に。い。ま。く。

飲む者あり。朝晩とかく。寒暑をちく。酒のほ
あし。い。も。か。海。王。に。青。れ。あ。り。か。し。に。い。ま。ま。ん
備。貸。其。賒。荷。と。郵。一。志。一。向。不。飲。何。後。昔。と。俗
に。純。益。病。と。名。附。て。病。の。部。と。に。陶。穀。清
異。録。と。ら。ふ。書。よ。の。せ。ら。ら。さ。て。く。を。か。し。酒
の。飲。ま。や。す。く。何。ら。よ。と。笑。ひ。酒。ふ

苦樂在心之章

い。づ。病。花。を。詠。あ。し。と。あ。ひ。は。ら。ふ。ま。や。ま。も。階
つむ。年。れ。色。さ。り。く。事。古。人。の。た。と。た。た。り。ら
も。為。と。や。さ。り。に。ま。く。何。ら。一。生。涯。の。ま。り。も。又

かくのこころ成るしとわらんども今さうあるを
 次(ま)方便てんぽうとなげきを是ぜ此こゝかしくしりも大
 悔日くわいじつして俄とつぜんふと来をたやうに世の人こころを
 かしきまを極ごくさてしく家身けみも世をいふまにさるま
 らの心海こころうみをくえんゆたけりし思ひを
 具ぐ作さくをくすむと意いとく知ちらるる
 一ひと夜よふちうて歳としを行いまら
 と前まへとく先生せんせいの作さくへとせられむ出いで生なむ
 い流ながるしおの道みちにておわらうとておれ流ながる
 いふけきとも。亦またおが見み識したおたがひ有ある

まり年としれらねるやとゆふとわらうたは
 おむむとわらうたはべし。無むと年としのくまを志し
 むと志しぬゆ俄とつぜんふとれらねるやとわらうたは
 ありたり。海うみをあら。志しと後あとも和わか、公こう界かい不ふ
 後あとらるのあまは。さやうにむとわらうて世よ上のま
 くれん乃のらふかろふと世よ相あ互い成なる。まが我われ
 亦また常じょうくの下した等らにとら後あとらる海うみをぬる我われ
 らる。まをたも海うみにむ
 行いむ(ま)年とし、表あはむ行いむ相あを
 いふん乃のらふかろふと世よ相あ互い成なる

ことごとくたまわくまことかやうにいつた家業を
 俗情のまきにあらうて世とふ不我まことふ
 のふならうておのれ成るるべし。まねる年れ
 くの終成りしとわせばこのもつたむなさを
 正月元朝もらわしむんを待たならぬふ
 十二月毎日不成るもさ海で人のことくたふ
 三かゝむゆと何れは苦楽なりふ事人の
 むさやふ何らうておのれ事終る何れ

朱鱗按すもふ。梧陰庵に主梨春先生の平生
 乃見識世人ことわらふ異なるに似く志も人
 ことわらふ世人と對せらる時のとわらふ。そふ對
 物と争ふ事かゝ。縦ば前ふ書載しごとく
 王さく琴を弾びんて。絃の断たむバ何のや
 ともた止らぬや。老子上善若水の章に
 之かつるもの。実ふ世の一奇人といひつる
 一。先生生れ常くの物終るあむ書めむた
 け書ぬまの文章よりうまそあゝふより
 まの愛にく筆とぞ先ぬ海に懸元の下

朱鱗按すもふ。梧陰庵に主梨春先生の平生
 乃見識世人ことわらふ異なるに似く志も人
 ことわらふ世人と對せらる時のとわらふ。そふ對
 物と争ふ事かゝ。縦ば前ふ書載しごとく
 王さく琴を弾びんて。絃の断たむバ何のや
 ともた止らぬや。老子上善若水の章に
 之かつるもの。実ふ世の一奇人といひつる
 一。先生生れ常くの物終るあむ書めむた
 け書ぬまの文章よりうまそあゝふより
 まの愛にく筆とぞ先ぬ海に懸元の下

